

次の問1，問2については1問を選択し，答案用紙の選択欄の問題番号を○印で囲んで解答してください。

なお，2問とも○印で囲んだ場合は，問1について採点します。

問1 企業の経営分析に関する次の記述を読んで，設問1～4に答えよ。

〔Y社の概要〕

資本金 5,500 万円，年商約 35 億円の外食チェーン Y 社は，首都圏に 23 店舗のイタリア料理店を展開している。外食産業は業績の低迷が続いているが，Y 社は，吟味した食材を使った料理を手ごろな価格帯で提供することで，売上を順調に伸ばし，過去 3 期連続で増収増益を続けている。昨年度は 5 店舗を新規に開店させ，現在，セントラルキッチンの拡張工事を計画している。

Y 社では，業績が好調なうちに経営体質の問題点を特定し，解決しておくために，経営分析を実施することにした。Y 社の貸借対照表と損益計算書を表 1，2 に示す。

表1 貸借対照表

単位 百万円

勘定科目	2008年度	2009年度	勘定科目	2008年度	2009年度
流動資産	132	166	流動負債	430	550
現金及び預金	85	107	買掛金	150	190
売掛金	15	19	短期借入金	210	280
原材料	11	14	その他流動負債	70	80
仕掛品	2	5	固定負債	190	180
その他流動資産	19	21	長期借入金	190	180
固定資産	585	708	負債合計	620	730
有形固定資産	360	450	資本金	55	55
無形固定資産	5	18	法定準備金	8	8
投資等	220	240	未処分利益 (うち当期利益)	34 (20)	81 (55)
			資本合計	97	144
資産合計	717	874	負債・資本合計	717	874

表2 損益計算書

単位 百万円

勘定科目	2008年度	2009年度
当期売上高	2,590	3,540
売上原価	1,640	2,450
売上総利益	950	1,090
販売費・一般管理費	860	960
営業利益	90	130
営業外収益	4	3
営業外費用	1	2
経常利益	93	131
特別損益	▲64	▲11
税引前当期利益	29	120
法人税等	9	65
当期利益	20	55

〔経営分析とその評価〕

経営分析は、収益性・安全性・生産性の3点から実施し、経営分析のための指標を表3のように計算した。

表3 経営分析指標

		2008年度	2009年度			2008年度	2009年度
収益性分析	総資本対経常利益率 (%)	13.0	15.0	安全性分析	流動比率 (%)	30.7	30.2
	総資本回転率 (回)	3.6	4.1		当座比率 (%)	23.3	22.9
	固定資産回転率 (回)	4.4	5.0		固定長期適合率 (%)	203.8	218.5
	売上高対総利益率 (%)	36.7	30.8		固定比率 (%)	603.1	491.7
	売上高対経常利益率 (%)	3.6	3.7		自己資本比率 (%)	13.5	16.5
生産性分析		2008年度	2009年度				
	労働生産性 (円/時間)	1,890	1,950				
	労働装備率 (千円)	430	480				
	1人当たり売上高 (千円)	3,100	3,800				
	1人当たり粗収入高 (千円)	2,200	2,700				

これらの情報などを基に、2009年度の経営分析結果を次のようにまとめた。

- ・収益性分析の結果は、おおむね良好である。特に総資本額が22%増加したにもかかわらず、総資本回転率が0.5回向上したのは、aが貢献した結果である。また、売上高対総利益率は、原材料の高騰の結果低下したが、そのほかの収益性指標は向上しており、特に①売上高対経常利益率が向上した点が評価できる。
- ・安全性分析の結果には問題がある。固定長期適合率が極めてb水準にある点である。ただし、流動比率は極めて低い水準にあるものの、受取手形がなく、cので、流動資産の回収に問題が生じても影響は小さく、短期支払能力は指標が示すほどには低い水準ではないといえる。
- ・2009年度における有形固定資産の増加は、新規開店に伴うものであったが、固定長期適合率に大きな変化はなかった。一方で、長期借入金が若干減少し、短期借入金が増加した。これは、本来長期に利用可能な資金によって賄うべき設備投資を、dと短期借入金とで賄っていることを示しており、健全な財務構造とはいえない。
- ・新規開店に伴う人員増を最低限に抑えた結果、生産性分析では、各指標とも2008年度に比べて向上した。しかし、同業他社と比較した場合、従業員1人当たりの売上高や粗収入高が見劣りしている。eなどによって、生産性の一層の向上を図る必要がある。

〔キャッシュフロー計算書の作成と分析〕

Y社は、財務の安全性に問題があるとの認識のもと、キャッシュフローを分析するために、キャッシュフロー計算書を次の方針で作成することにした。

- (1) 直接法と間接法のうち、間接法によって作成する。
- (2) フリーキャッシュフローは、“営業活動によるキャッシュフロー+投資活動によるキャッシュフロー”で計算する。
- (3) キャッシュフロー計算書とフリーキャッシュフローは、過去3期分を作成・算定して、トレンドを分析する。

過去2期分のキャッシュフロー計算書と過去3期分のフリーキャッシュフローは、それぞれ表4と表5に示すとおりである。②これらから、新たな問題・課題を抽出することができた。

表4 キャッシュフロー計算書

単位 百万円

	2008年度	2009年度
I 営業活動によるキャッシュフロー		
税引前当期利益	29	120
減価償却費	41	46
売上債権の増減	▲15	▲4
棚卸資産の増減	3	▲6
その他資産の増減	▲2	▲2
仕入債務の増減	10	40
その他負債の増減	38	10
法人税等の支払額	▲9	▲65
合計	95	139
II f によるキャッシュフロー		
有形固定資産の増減	▲130	▲136
無形固定資産の増減	▲1	▲13
その他資産の増減	▲44	▲20
合計	▲175	▲169
III g によるキャッシュフロー		
借入金の増減	89	60
資本金の増減	0	0
配当金支払額	▲1	
合計	88	h
IV 現金及び現金同等物の増減	8	22
V 現金及び現金同等物の期首残高	77	85
VI 現金及び現金同等物の期末残高	85	107

注 h には、特定の数値が入る。

表5 フリーキャッシュフロー

単位 百万円

年度	金額
2007	14
2008	▲80
2009	▲30

設問1 本文中の , , , に入れる適切な字句を解答群の中から選び、記号で答えよ。

解答群

- | | |
|----------------|-----------------|
| ア 販売費・一般管理費の増加 | イ 売上高の増加 |
| ウ 運転資金の増加 | エ 買掛金の減少 |
| オ 自己資本の増加 | カ 高い |
| キ 中途採用の拡大 | ク 低い |
| ケ 福利厚生の充実 | コ レイバースケジュールの工夫 |

設問2 (1) 本文中の に入れる適切な字句を25字以内で述べよ。
(2) 本文中の下線①が実現できた理由を財務諸表から読み取り、30字以内で述べよ。

設問3 (1) 表4中の , に入れる適切な字句を答えよ。
(2) 表4中の に入れる適切な数値を答えよ。

設問4 本文中の下線②に該当する問題・課題を解答群の中から二つ選び、記号で答えよ。

解答群

- ア 2009年度の営業活動によるキャッシュフローが2008年度に比べて増加していることから、Y社の現在の財務構造に問題がないと判断できる。
- イ 財務活動によるキャッシュフローから投資活動によるキャッシュフローへの資金の流れが認められる。このような財務構造においては、長期資金が増加していない点に問題がある。
- ウ 投資活動によるキャッシュフローがマイナスになっているので、設備投資が過多になっていると判断すべきである。
- エ 投資活動によるキャッシュフローのマイナス分の大半が、財務活動ではなく、営業活動によるキャッシュフローによって賄われている構造は、好ましい状態ではない。
- オ フリーキャッシュフローが2期連続してマイナスになっているので、セントラルキッチンの拡張工事の延期を検討する必要がある。